

# 六花

RIKWA

11

俳句雑誌りつか

2016 (平成28年)  
cover design Yuna Mizuno

特別の線香を焚く秋彼岸  
秋冷の鍵穴ひとつ太子堂  
弁慶の硯へ小鳥来てをりぬ  
蟻螂に負けじと吾も息をとめ  
秋の蚊の衰へしらず式部の間  
瀬田川の流れは宇治へ澄みながら  
避けがたき砂丘の濡れ場秋時雨  
秋冷や前行く人のふくらはぎ  
越えるべく秋の時雨を越えにけり  
栗飯に茸の汁や地味ほのか  
倒れ稲鳶が蛙をわしづかみ  
弟子の句のみな佳く見ゆる秋灯下  
板の間に死してみどりのすいっちよん  
秋灯の一両電車玉手箱  
大杉を背にいただきぬ栗ご飯  
風上に向き蟻螂の動かざる

橡餅のもち肌袋の中なれど  
雁木より降りて汀の栗を踏む  
切株に鼠の耳の茸かな  
放し飼ふ矮鶏うづくまれ秋時雨  
まぼろしや猛者海老弁当二つのみ  
秋の蝉寄る辺なけれど歩みけり  
流木を洗うて音の澄める水  
秋の蝶雨の志渡坂越えにけり  
落つる音走れる音や秋の川  
大山の狭霧に朝の心置く  
目の端に伯耆富士なる薄紅葉  
艶の葉も艶のなき葉も露しとど  
高杉に分水嶺の秋時雨

盆の月揃うて母の部屋に居り  
茎見せて蓮の大葉のひるがへる  
月明に洞あきらかな大樹かな  
新涼の海へはみ出す観覧車  
島影を離るる舟や盆の月  
広縁に父の加はり盆の風  
新涼の束ねし髪をほどきけり  
めまとひを払ひ一句を授かりぬ  
線香の炎払へる秋暑かな  
虹消ゆる背後に夫の立つてをり

# 露草や摘めば逃げゆきさうな色

志方 章子

つゆくさやつめばにげゆきさうないろ しかたあきこ

明るかり夏草刈りしあとの土手

露草や摘めば逃げゆきさうな色

大楠に上りつめたり夏の蝶

大地震の前ぶれならむ蜻蛉涌く

穴あきのシャツ微笑まし日焼けの子

露草のはかないイメージを活かしながら詠んだ独創的な比喩「逃げゆきさうな色」がいい。「露」という名前そのものが、もともと露の世、露けしなど儂いという意味を強く含んでいる。また友禅の下絵も露草で描く。露草で描かれた下絵は残らない。友禅流しで金沢、浅野川の水とともに流れて消えて行く運命をも連想させる。章子の現在の心情的なものも投影していると思われるが、心にざざ波が立っているときの方が文芸に良い結果をもたらす場合が多い。自己犠牲のようなものも必要なのかもしれない。幸せが逃げそうなのか。

# 雪卿集

栄西忌

佐津のぼる

食べごろに枇杷の色づく栄西忌  
夜干し梅いま耳たぶのやはらかさ  
風出しや風鈴の音やや密に  
息づらき日射しの午後をみみず這ふ  
かはほりや辺りいつしか昏れてをり

流れ星

升田ヤス子

空蟬の姫ひおうぎにすがりをり  
七日盆小餅の予約済ませけり  
立秋や浦曲の空に魚を干し  
線香の焦げあと二本施餓鬼莫塵  
流れ星耳を掠めてゆきにけり

# 雪卿集

百日紅

永田万年青

日を浴びてふはと膨らむ百日紅  
盆供養仕草を真似る子供かな  
外に出て引き返したる酷暑かな  
炎昼や鎮まりぬたる繁華街  
片蔭の途切れしところ躓きぬ

大楠

志方章子

明るかり夏草刈りしあとの土手  
露草や摘めば逃げゆきさうな色  
大楠に上りつめたり夏の蝶  
大地震の前ぶれならむ蜻蛉涌く  
穴あきのシャツ微笑まし日焼けの子

# 雪卿集

蚊

松本文一郎

飼ふ飼はぬ堂々めぐり星月夜  
蹴とばして跳返りくる竹婦人  
難読な卒塔婆の梵字盆の道  
靴下の上から刺す蚊忌々し  
蚊を防ぐ葉線香総ぐるみ

百合

出口

誠

先端を大きく反らし百合咲けり  
大雨に引きたてられて大夕焼け  
梅雨明けてせせらぎの音増しにけり  
炎帝を受けて白壁輝きぬ  
木下闇玄関先の人力車

# 雪樹集

短  
夜

住田千代子

散るまでを百合の香りの衰へず  
ほらそこと指さしあへる夏薊  
短夜や思ひ出せざる怖き夢  
楼門を抜け来る風の涼しかり  
立秋や残り布もて縫ふ小物

夏  
蝶

藤生不二男

夏蝶の雨に羽音の濡れてをり  
まぶしさの声を聞きをり夏雲雀  
おほかたの蓮の大葉のひるがへり  
須磨寺の背山まぢかに滴れる  
羅をもてあそびある女かな

# 蛍雪譚

六甲選

二十八年十一月号鑑賞

先月号で「三年先の稽古」と言った。市川伊團次がメールで「ことりさんの作品を後世に残す偉業、何時の世か先生に世間が感謝する日がくる」と言ってくれた。何時の世かは分からないが……。例えば伊東若冲は「千年後には自分の画を誰かが認めてくれたらいい」という信念で描き続けた。稽古でなく「千年先の仕事」である。仕事とは「事を仕る」こと。仕るとは謙譲語で「させて頂く」という感謝の気持ち強い行い。伊團次の言うように「残す」のではなく六花の皆様のご協力で六花を発行し、「残させて貰っている」のを主宰は忘れない。俳句は自然への感謝と挨拶。「どうだ巧いだらう」という慢心は文芸ではない。奢った気持ちを持っていないか、主宰は常に、自らへ問いかける。一生一句に少しでも近づこうと。この欄で仲間の句を見ると「今何を考えているのか」がよく見える。その人の立っている位置や高低も見える。吟行で、その地に挨拶が出来ているかも重視する。挨拶をすれば懐深い句を授かる。吟行地では出会った物に深く挨拶をし、閑かに問いかけ、その場では言葉にせず、帰宅してから深く井戸を掘るように挨拶したことをくみ出す方法もある。ただ吟行で旅行気分の句会をして何点選に入ったかどうかは問題ではない。一句授かれば上出来。だがどう評価したか、そんなことを言っているようではまだまだ未熟。本当の俳句は進まない。どう出会ってどう挨拶を交わしたか、じっくり帰ってから反芻すればいいのである。明日をも知れぬ身で遠出するの、吟行の夜、多作多捨するのも鍛錬。不純物を取り除く勉強なのである。作った句を記憶しているのは、まだまだ

だ不純物が混じっている。忘れそうになったころ蘇る句が本物だと思う。自戒をこめて……。

### 先端を大きく反らし百合咲けり

出口 誠

誠俳句も万年青大人のように客観写生に徹している。

この句も百合の花びらの状態を写し取ったもの。これは画でいえばスケッチの素描の段階に相当する。そこから進めて佳句になったり、そのまま手を加えず秀句になる場合もあり得る。

### 店に入る何言わずとも冷奴

溝淵 弘志

店主と客の阿吽の呼吸を詠んだ。店主は「らつしゃい」と声を掛けて、お通しに冷や奴を出す。客もそれが出てくるのを解っている。続いて黙っていても麦酒が大ジョッキで出され、立て続けに三杯乾してから、「今日、何かお薦めある?」と声を出すのである。「へい、金目鯛の造り一丁!」と冷蔵庫から出して包丁捌きよろしく料理をはじめ。刺身の味は包丁の切れ味で決まる。つまりよくエッジの効いた刺身でないのだ。「太刀魚もあるよ」「いいなあ、それ行こう」「あいよ太刀魚一丁、刺身と塩焼き」もう声を張り上げない。冷奴は、出された瞬間するりと喉を通り抜けている。

